

美作の中世山城をもとめて



一歩いて、見て、描く

— 二七歳の教育長が得た「課題」

前原・森 おはようございます。

前原 今日は山形さんに、美作地方の中世山城に興味を抱かれた経緯や調査の方法、苦勞話、またこれから将来に向けての様々な思いを、ざっくばらんにお伺いしようと思っています。どうぞよろしくお願ひします。

山形 こちらこそ、よろしくお願ひします。

前原 それにしても、山形さんは随分若い時に美甘村の教育長に就任されていますよね。何歳の時ですか。

山形 二七歳の時。あん時は他にそんなんはおらんかった。朝日、毎日、読売の三大新聞には、全部三面記事のトップで採り上げられた。

前原 そうですか。どういう経緯から教育長になられたんですか。

山形 最初は親が始めた石屋を継いでやりようつた。そのうち、教育委員の選挙に出て、次点で落ちてなあ。そしたら、上位者が教育長になったんで、欠員が出て、繰上げ当選ということになった。そしたら、すぐに教育長が辞めてしもうた。経済観念があつたからでしょう(笑)。教育長は日勤で、出張旅費なんかも少ない。会合もたくさんあつたりしましたし。

森 持ち出しが多かつたということですね。

山形 そう、まともな者はやつとられん(笑)。苦勞したな。後任には私になつたんだが、若いし、新聞に採り上げられたから張り切りましてな。「前へ、前へ」という感じでした。やつぱりうれしかつたんじゃ。あれだけ新聞に出されてなあ、舞い上がらんもんはおらんで、おそらく。じゃけえ、一生懸命じゃ。

前原 教育長時代にはどのような活動をされていましたか。

山形 夜の二時より前に家に帰ることはなかつたな。美甘には四〇いくつの集落がある。そこを一日一集落訪ねて行って、晩に土地の人と会合をする。その準

語り 山形省吾(城郭研究者)

山形敏子(夫人)

聞き手 前原茂雄(九州大学)

森 俊弘(岡山地方史研究会)

(二〇一〇年四月四日 津山市・山形家にて)

山形省吾(やまがた・しょうご)

大正一五年(一九二六)、岡山県真庭郡美甘村当政(現真庭市)出身。小学校を卒業後、

父の代から始めた石工を継ぐも、教育委員となり、若十二七歳で美甘村教育長に就任。

考古学者・近藤義郎氏らと村内の発掘調査を行うかたわら、農業振興のため、連日連

夜村内の各地区を回り新しい農業技術を指導。のち大阪にて就職、退職後、郷里美甘

そして津山に戻り、中世山城の調査・研究に没頭。三五〇を超える中世山城を調査し、

記録作業を行う。八四歳を超える現在も積極的に調査・作図を続け、山城の普及・保

護活動にも使命感をもって取り組んでいる。

備やまとめをせにやあいけんけえ、早うは帰れんかった。

敏子夫人 そうそう、夜中の一二時にもなつてなあ。

山形 十羽養鶏や栗の接木、保温折衷苗代なんかを普及して回った。「農業を知らない」石屋の省ちゃん、何を言うるんなら」いうて、聞いてくれん人もいっぱいおった。でも、教育長をやつとつた昭和二七年（一九五二）から三二年いうのはまだまだ食糧難の時代でな。少しでもよりよい暮らしをして家庭が幸せになつてもらうためには、新しい方法をちよつとずつでも広めていくよりなかつた。「お蔭で、ええ栗ができたで」いうて持つてきてもろうた時はうれしかったな。うまくいくことがわかつたら、いっぺんに村中に広まつた。

前原 そういう仕事も当時は教育長の役割だったのですね。また、発掘調査もされていきますよ。

山形 考古学の近藤義郎先生（故人・岡山大学名誉教授）がよう来たな。大学の先生というのは八月が休みでしょう。僕は石屋だから、八月が一番忙しいわけ。忙しい時に来て、「山形さん、ここを掘れ、ここを掘れ」と言いだすもんじゃけえ、弱つた（笑）。また、僕は馬鹿力がありますけえ、トレンチを入れるのが早いんじゃ。それで、近藤先生が便利よう使うたんだらう（笑）。宇南寺のたたら製鉄遺跡の時もそう。僕が「陶棺じゃ」と言つて、一緒に掘つてみたんじゃ。そしたら、陶棺じゃのうて、たたら製鉄の基礎だった。あれが出たのは初めてだったそうですなあ。報告書ができた時に、近藤先生に、「先生なあ、ここに山形雀吾いうもんと一緒に掘つたと書いてくれたら何も言やあせんが、一言も書いとらん。先生、一生負い目じゃで（笑）」と言つたら、先生は「それは言うなえなあ。それだきやあ負い目に感じとるけえ、今後便宜を図るけえ」と言うてなあ（笑）。

前原 その後、何か便宜を図つてもらうようなことはありましたか。

山形 ありやあせん、ひとつつも（笑）。

前原 そうですか（笑）。他にはどういふ発掘をされましたか。

山形 住居跡を探そうということになつてな。「あつち掘れわんわん、こつち掘れわんわん」で（笑）、洪積世段丘を掘りまくつたなあ。せえでも、出てこん。

ひとつつも。いつつも近藤先生と一緒に、「あつちを歩き、こつちを歩き」だった。わしがえかつたんだらうなあ（笑）。（近藤先生は）休みになるたんびに来てなあ。これ（敏子夫人）も悪い顔はすりやあせんしなあ。これはよう協力してくれとるわい。

森 山形さんからすると、近藤義郎先生はどんな感じの人ですか。

山形 ざつくばらんで、何でも言う人でなあ。

敏子夫人 近藤先生は、本当は自分の方が、歳がひとつ上なんだけど、「ひとつ下だ」と言うてな。

山形 そうやって、人をおだてるんだ。あれが近藤流の持ち上げ方でなあ。若い教育長だからといって、馬鹿にするようなところは全然なかつた。

前原 奥さんも随分知つておられるということは、近藤先生は山形さんのお宅にもおいでだったのですか。

山形 先生は随分酒が好きですけんなあ（笑）。せえじゃけえ、帰る時には必ず五年ものとか七年ものとかいう梅酒を造つて持たせようつた。来るたんびに土産として持つて帰らしようつたけえな。また、これ（敏子夫人）が喜んで造りようつたんじゃ。それで、あの先生が言うてくれたのが、「山形さん、ひとつ中世のたたら製鉄をやれえ」ということだった。それで考え始めたんじゃ。

前原 なるほど、近藤先生が課題を出されたのですね。教育長を辞めて大阪に出られてからも、継続して考えるようなことはあったのですか。

山形 いや、まったくのブランクです。最初は運送会社だったんだけどな、そのうち転職して車のボディ・カヴァーや幌を中心に製造・販売する会社に移つた。僕は営業で全国あちこちした。これ（敏子夫人）も一緒に会社でデザインを担当していて、試作品を全部作つていた。どこに行つても方言が抜けんけえ、かえつて信用してもらつて、営業はうまくいったすなあ。

敏子夫人 美甘言葉が抜けんけえなあ。いまだにそう。

山形 支店があるんで、いろいろ史跡も見て回つた。今もういつべん回つてみたと思よりります。

前原 山形さんは、やはり小さい頃から歴史が好きなんですか。

山形 好きなんだろうなあ。何か興味を持つもんを誰かが持つてきてくれたら、食いつく感じじゃなかったかなあ。珍しいものに食いつくという人間の心理があるでしょう。それをもとに、新しいものを創りたがる



という心理が、他人よりちょっと強かったという感じかなあ。ころくに勉強しとらんけえ、大学の先生なんかから教えてもらおうというのがありがた。だから、就実大学でやつとる岡山中世史研究会に今でも行く。勉強せざるをえない。基本ができてないけえ。せえでも、前原さんや森さんなんかは、しっかりとした研究を土台に発表される。おふたりの勤勉さにはほとほと感心しとるんよ。それが僕にはできませんなあ。「わしにはどがいしたらしつかりしたものができかなあ」と考えてみた時、やつぱりしつかりと歩いて、見て、図面を確実に描いて出していくことが、僕の力になるんだなと思つています。でもたたら製鉄は、これくらい難しいもんないねえ。

森 城より難しいですか。

山形 難しい。城は証拠がありますがな。ところがたたら製鉄だけは、村下(むらげ)が証拠をみな消して歩いとりますがな。自分の技術を盗まれまいとした意識が高かつたんだと思ふんだけど。たたらのは実際に見るのが一番勉強になるね。出雲の横田や吉田にも何回も足を運びました。それを勉強しているうちに、尼子氏に最初に興味をもったわけな。尼子経久あたりが、その辺りを全部自分のものにして支配してね。そう考えているうちに、「武将というのは、いったいどういう人種なんだろう」と思い始めてなあ。研究というほどでもないが、それから、それに足を突っこんでいきゃあいくほどおもしろいかな。

森 退職されて、大阪から美甘に戻つてきてからの、山城調査に取り掛かる直接

のきっかけというのは何なのでしょか。

山形 やつぱり、きっかけはあくまでたたら製鉄。近藤先生にも勧められとったけえなあ。美甘に戻つてからも、先生は来ようつたし。菅谷の塚ヶ成古墳の発掘やらで。当時の教育長は「近藤先生みたいな偉い先生を発掘にはよう呼ばん」と言つていたが、僕が先生に電話したら、「ほん、ほん行くけえ」みたいなもんじゃ(笑)。やつぱり若い頃の梅酒が効いとるわなあ(笑)。そしたら、先生は「塚ヶ成古墳発掘の報告書は、山形君、君が書けえ」というてな(笑)。でみんながわかつつて言うんじゃけえ(笑)。

前原 若い頃の負い目からそう言つたのですかね(笑)。

山形 そうだろうなあ(笑)。調子のええ人であ。一生わしを使いまくつたわ(笑)。久世や沼(津山市)の調査の時も引つ張り回されたわ。

前原 たたら製鉄への興味を出発点にして、城や武将などに徐々に関心が広がつてきたわけですね。

山形 そうそう。出雲の横田辺りに行くと、「河副美作守」といつた看板まである。そういえば美作にも河副といった姓があるしな。それに尼子の家臣で綾部(津山市)に土着した多胡氏みたいななんもおるしな。だんだん美作と結びついてきた。それで、わしは大それたことを考えてつてな。戦国武将を研究して、ひとつ小説を書いたろうかなと思つて(笑)。それでな、書きかけたんよ。そがいしてみりゃあ、「研究が足らんけえ、どがいにも話にならんなあ」ということに気がついて。それで研究しかけたんが、本当は強かつたなあ。あれから深みにはまったような気がするわ。横田に行くと、たたら製鉄跡の周囲に城が多いんだ。「何でこれほど多いかなあ」と思つて。深みにはまっていけばいくほど、おもしろうなつてくるんじやなあ。武将というのは、僕はあんまり好きじゃあない。どっちかといえば、嫌いなんじや。庶民をいじめた方じゃからね。何でそれほど庶民をいじめたんだらうか、妙味は何なんだらうかと思つてな。欲そのものだね。だから気になる。

前原 そうなると、自分の古里の岡山県の城郭も気になつてくるわけですね。

山形 おう、あるがな、あるがな、城が(笑)。最初は岡山県じゅうの山城を歩

いて回って、できりゃあ、全部縄張り図にでも残しておきたいなと思っていた。そうすりゃあ「後のもの便利がええんじやないだらうかな」と思うて。最初に、どのくらいの数、どんなもんがあるかと調べていくうちに、次々にあちこち行つた。備中の笠岡や真鍋島の方にも行つたりした。県内だと、何百とあるわけじやがな。そこで、僕の寿命を計算してみたわけ(笑)。とてもじやないが、こないな様をしようつたら、何にもならん。それで、さつと頭を切り替えて、美作の国だけにすることにした。この頃は、美作じゅうも全部は難しいなあと思ようるけど。

前原 でも、最初に美作国内に限定した時には、「美作国ぐらいだったらできるだらう」という予測があつたのですか。

山形 そうそう、できるだらうと思うとつた。けど、実際はすごいねえ、数が。数もそうだし、前原先生や森さんにはわかつてもらえらると思ふけど、ひとつの城に入り込んでくる武将や勢力のことを調べるだけでも、大変なエネルギーがいる。

二 「勇士」ふたたび

— 動き出した「課題」

前原 美甘に戻ってから、すぐに調査を始められたわけではないんですか。

山形 そうです。調べ始めたのは平成二年(一九九〇)頃からですけえな。

前原 調査をする目的を持った上で、一番最初に登つた城はどこなんですか。

山形 麓城(旧美甘村)です。うちの家(旧美甘村当政集落)の、ほん裏ですわ。思い出のあるところであら。上の方は自然薯が掘れるんですわ。それで篠竹を伐りに上がりようつた。小学生ぐらいの時にはなあ。てっぺんまで垂直に上がって行くんじやけえ。すごいところだつた。でも道ができてつたなあ。

敏子夫人 「城山」言ようつたな。

山形 篠竹を束にして、エボ(節)のところを括つてなあ、ソリのようにするわけ。それで、それに跨つてなあ、滑り降りるわけだわ(笑)。よう怪我もせず、

下まで降りようつたなあ思うてな(笑)。垂直じゃからねえ。下の方に成る(平らな)ところがあつて、道路までは飛び出さんわけだ。今は考えただけでぞつとする(笑)。ようやりようつたなあ、思うて。それを何回もやるとるんだからなあ。私含めて三人ほど悪いのがおつてなあ。「三勇士」いうて言ようつた(笑)。悪さばあしようつた。学校にも行かずに(笑)。それで親に怒られたら、山に隠れてなあ、二日でも三日でも籠りよつた(笑)。親は探してもしやあせん(笑)。

前原 山城に籠城されていたわけですね(笑)。

山形 そうそう(笑)。「三勇士」は上級生とはつかり喧嘩をしようつた。しよつちゅう負けるけど。下級生や女の子を絶対にいじめることはなかつた。

前原 確かに「勇士」ですね。

山形 「城山」ではそれが一番思い出にあるなあ。

前原 子どもの頃に、麓城が城跡だということは聞かれていたんですか。

山形 「城山じゃ」いうことだけ聞いとつた。「麓城」みたいなことは絶対に言ようらんかつたからな。城跡に上がつても、城跡の形態なんかは全然気づきませんでした(笑)。「城山」にはいろいろ思い出があるからなあ。美甘に戻つて、調査するために最初上がったのは「城山」だつた。それに「城山」では、道ができて壊すのもやつとる。それを見て、「これはいかなあ、描いとかにやあ絶対にいけんで」と思うた。

前原 なるほど。それ以来、登るだけでなく、だんだんと縄張り図を作成されるようになつたわけですね。最初の頃はどやうやって勉強されたのですか。

山形 始めの頃の図面は全然だめなんです。最初はほとんど村田修三編「図説中世城郭事典」(新人物往來社、一九八七年刊)、千田嘉博・小島道裕・前川要著「城館調査ハンドブック」(新人物往來社、一九九三年刊)で勉強させてもらつた。本気で勉強せんもんだから(笑)、まずいところがあつて、描き換えの繰り返しです。

前原 新しい遺構を見つけたら描き足していけるわけですね。

山形 うん、それもあるし、減していったり。これは描いてはいけないところだつ

たとか、想像であったとか。教科書を読むと「想像を描いてはいけん」と書いてあるから、始末が悪い(笑)。守らんと(笑)。

前原 最初の頃は、自然の地形なのか遺構なのか判断できずに苦労されたこともあるんじゃないですか。

山形 ありますなあ。それでもだんだん歩きよくなるうちになあ、「これは人の手が加わつとるな、これは自然の地形を利用した構えになつとるな」とわかるようになる。一口に「三五〇城の図面を描いた」とは言うても、一回登れば描けるいうもんではないですからなあ。岩屋城(旧久米町)なんかは、何十回と足を運んでようやく描ける。

前原 山城を歩いて楽しむという人はとても多いですよ。しかし同時に、縄張り図を描いて後世に残すという作業は誰でも行っているわけではありません。山形さんは最初から縄張り図を描く心積もりだったのですか。

山形 図面を描かにはあ、残りようがない。発掘ができません。その形のもは風雨にさらされて、次々に崩れていきよう。道を作つたりして、人間によつて崩されていくこともある。早めにきちつと図面を描いておくと、ここに何があつたかわからんようになってしまふ。だから、「それだけはやつておきたいなあ」と思っていました。最初からそこまで考えていたわけではないけど、すぐにそれに気がついたね。縄張り図いろいろ描き方があつて、どんな風に表現するのかというのは、その人その人の工夫が大変あるようすなあ。「どのよう表現したら、現実のものがみんなにわかりやすい紙面の上で見えるだろうか」ということが、この頃わかつてきて、一生懸命やりようるんじゃけど。

前原 そういう気持ちだが、図面の描き直しということにもつながっていくんですね。

山形 描き直しいうても大変ですよ。岩屋城なんかでも、一枚描き上げるのに、最低五日ですけえなあ。そりやもう、まんじりともせず、一生懸命描きようらにやあ。休み休みだつたら一週間はかかるなあ。最初の頃だつたら、十何日かかりようつたなあ。

森 最初の頃は筆で描かれていたんですよ。

山形 そうそう。和紙の上にな。描き間違えたら、その一枚はボツですわ。今でも和紙にまとめた人もあるんで。新見の和紙に描いとる。「和紙に描いて残したろう」というのが当初の目的だからなあ。出版できりやあ別だが、できなかったら、当面は息子に残しておいて、その後は図書館にでも寄附するつもり。

前原 作図されるだけでなく、歴史的背景の解説も書かれておられますよ。人物を調べたり、資料を採す時にはどうされていますか。

山形 まあ、図書館じゃわな。でも「勝山町史」みたいに、変なことを書いとるもんもあるんよ。そういうのは困る(笑)。石屋を一生懸命やつとる頃、森本清さん(故人・「勝山町史」執筆者)が着物にもんぺを履いて来てなあ。忙しい時に限つてやつて来て、昔の話をして帰る。「大風呂敷を広げてから」思うて聞いとつた(笑)。言やあせんけどなあ(笑)。だから、森本さんへの重みが全然感じられんんんん。

前原 「湯原町史」を書かれた人ですよ。

森 それから「勝山町史」や「新庄村史」も書いておられます。

山形 そりやあ、前原先生辺りが見たら、こつびどう怒るような無茶が書いてあるんじゃけえ(笑)。あの人はよう喋るんじゃ(笑)。わしもつい聞きようつたけえ。変な智慧が付いてしもうた(笑)。すばらしい人だつたけど、書いたものには間違いが多いなあ(笑)。その点、森さんの書かれた「久世町史」や「鏡野町史」はよろしいなあ。大変助かつとります。

森 いえいえ(笑)。



三 二本杖で歩き、ペンで描く

― 山城調査のあとさき

前原 ところで、調査前の準備としては、どのようなことをされるのですか。

山形 一番地えるのは、二五〇〇分の一の地形図(都市計画図)を買うんがね。津山市では一枚五〇〇円ですから。最近、津山市も使いやすいようにA3にコピーしてくれるんですが、それでも五〇〇円(笑)。真庭市はありがたいことに安いんです。それに、ものすごい便宜を図ってくれるしね。真庭市ほどありがたいところはない。

森 すみません。ありがとうございます。

前原 津山市や真庭市以外はどうですか。

山形 二五〇〇分の一のええ地図が手に入らないですなあ。一〇〇〇〇分の一の地形図を拡大したものをもらうが、図面が雑だしなあ。勝田町はまだ地図がいけんな。久米南町もちょっと悪いな。旧英田町(美作市)、旧旭町(美咲町)がこの頃ようになった。二五〇〇分の一の地図がよくなってくれたら、すぐに調査できるとねえ。

前原 確かに、基礎になる地図がしっかりしていると、調査する際の情報量や記録する際の精密さが全然違いますもんね。それにしても、一枚五〇〇円だとすると、いろいろな場所の地形図を取り揃えるならば、相当の金額になりますよね。

山形 いやいや、相当どころではない(笑)。すごいですよ。四枚くらい合わせてひとつの城の図面が成り立つこともあります。城の端っただけが載っているとあった地図もあるし。それには、ようにくたびれた。そうすると、城ひとつだけの図面を作るのに、二〇〇〇円でしょう。情けないような気がしようた。それらの地図をつないで一枚にして、調査に出かけるわけですから。たまったもんじゃないですわな(笑)。こういうことはみんなには言っていないけどね。今日は「苦労話を話せ」ということなんで、喋っとります(笑)。

前原 調査に行くまでの段階で、目には見えない大変な準備をしないとけないということですね。ところで、調査に行かれる時はどんなものを持って行かれるのですか。

山形 鉛筆とナイフと、鋸も。メジャーも。いろんなものを全部持って行っている。ナイフはいろんなことに役に立つ。箸を忘れたら箸を作ったり。鉛筆を削る時もそう。それから杖が握りにくかったら削って調整する。ナイフはどうしてもいるようすな。

前原 やはり杖があったほうがよいのですか。

山形 僕はねえ、二本杖で行くんです。というんが、年を取ったら、すねん坊主(脛)が痛くなる。それをカヴァーするには、絶対ストックが要る。専用のものを二組持つとります。桜と椿の木のものを持つとります。自分で山に行つて伐つて作りました。桜と椿は、しわい(硬い)からええんです。

前原 他にはどのような準備をされますか。調査当日はどんなことをされますか。

山形 地区ごとにまとめたノートがあるわな。そこに詳しい人の名前も書いておる。その人に連絡してみても、都合がええようなら一緒に登るし、悪けりゃあ自分だけで登る。午前中で終わるようなら、昼までに帰ってくるし、「今日は長うかかりそうじゃなあ」思う時は弁当を持って行く。雪の中で弁当食べるのはかなわんなあ。立てつて食べる。立ち食いじゃあ(笑)。写真はほとんど撮らんね。あまり上手じゃないから。とにかく歩き回るね。歩き回つて、疲れてきたら帰つてくるといった感じかな。続けて行くことはないな。一日狭間(一日おき)に行く方が体が楽なんじゃ。連続で行つたら、前の日の疲れが残つとるけえな。そりゃあねえ、どない言うても、八四歳の体力いうたら限界があるですよ(笑)。走らんが全然スピードが出んもんね。外反母趾があるしね。自分のペースでいかにやあ長持ちせん(笑)。

前原 あまり知られていない城跡を調査する場合、どういう情報に基づいて出かけるのですか。

山形 村や町に行つたら、次々に聞いて歩きますけんなあ。それで目星を付ける。

前原 すでに縄張り図が作られている城に登る時は、それを基本にして調査するのですか。それとも、先入観なしで登るのですか。

山形 縄張り図がすでにある場合は、それを基本にして登ります。

前原 では、その上で確認をし、違うところや補足すべき点を探していくという手法ですね。

山形 その縄張り図が正確かどうかということを確認するところから始めます。しかし、正確に描くというのはよっぽどタフでないといけません。篠竹がびつしり生えて、イガイガがいっぱいあるところを掻き分けて、喧嘩しながら行くんじゃないか(笑)。だいたい怪我しながらということになるな。

前原 城跡には、城の遺構だけでなく、磐座や炭焼き跡などいろいろな遺構がありますよね。

山形 そうそう、それがわかってくるようになってくると、大変おもしろくなってくる。それでも、自分なりにそれなりに描けるようになるには、二〇年はかかったんじゃないかなあ。自分だけで本を読んできていくということは、時間がかかるということじゃ。つくづく思うでな。

前原 話が少し逸れるようですが、城跡を見たら、だいたい誰が作ったかわかりますか。何か技術が共通するところがありますか。

山形 それはわかるなあ。城主が転々と移動して行ったのを追いかけると、技術はほとんど同じじゃけえな。

前原 ということは、それぞれの城主が特徴をもった築城技術をしているということですね。そうしたことがわかるわけですね。

山形 わかるなあ(笑)。そういうのがわかると、ひとりで喜んでいる(笑)。江原氏なんかはわかる。人夫を自分の領地から連れて行つとるわなあ。それで築城させてる。



森 沼元氏ではないですか。

山形 沼元だったかなあ。自分の領地から人夫を連れて行つたら、あとで殺さなくともええ。秘密を喋らんから。人夫代は出しとるだろうな。人夫代を出さんとええ仕事はせんから(笑)。

森 なるほど(笑)。ところで、話を戻しますが、実際に、城跡ではどんな風に調査されて、家に帰ってからどのようなようにまとめられるかなど、具体的にお聞きできればと思いますが。

山形 山城が上がった時、最初はラフスケッチでな。方眼紙に描いていく。

森 その際に、だいたいの長さの目安はあるんですか。方眼にどれぐらいで、とか。山形 いや、ないです。だいたいね。長さのおおよそは書き込みます。現地ではラフスケッチする時は、描くのに必死なんですよ。城跡の各部分をそれぞれラフスケッチしたのを、あとで集めて、スケッチブックにまとめ直して描くといった感じですよ。その上で、さらに正式な縄張り図を描く際に、距離や高さなどを地形図に沿って正確に落としていくといったやり方です。

前原 こうした縄張り図に書き込んである地名などは、現地の方に聞き取りされた結果なのですか。

山形 そうそう。最近では「伝」という文字を頭に付けて書くようにしてるんですね。

前原 スケッチブックに「済」という文字があるのは、もう正式な縄張り図に消書きし終えたということですか。

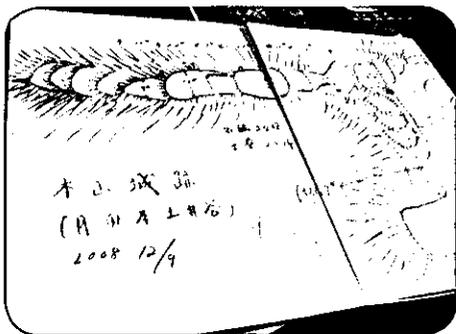
山形 そうそう。

前原 ラフスケッチには長さが書いてありますね。

山形 だいたい正確です。

森 歩測ですか。

山形 歩測です。最初の頃はいちいち測りよつ



たんじゃ。メジャーを持って行つとるから。でも、そのうち、メジャーを使って測つとるものと、測つたらんもんとを比較しても、ほとんど変わらんことに気がついてきた。正確なんじゃ。「こりやもう、メジャー使わんでも世話あないなあ」と思うてな。

前原 ということは、もう歩測だけで、ある程度正確な長さが算出できるということですね。

森 すごいですね。スケッチブックには寸法を描いていないものもありますが、そういうものでも、ある程度寸法がわかるような表記をされているということですね。

山形 そうそう。それに、目で見て、歩いてみて、「だいたいこのくらいの長さか」と思って、実際にメジャーで測つてみたら、まず変わらんですな。

前原 そういった自信が付いたということですね。

山形 時たまはメジャーで測りようるけどな。肝心なところとかは。二五〇分の一の地形図で、山の稜線がはっきり描いてある場合は、今はだいたい正しく描き込めるような気がするなあ。それから、覚えとる間にまとめるなあ。頭に残つておるうちに図面を描かんといけん。忘れてからでは、また山に走らにゃいかん(笑)。

前原 ということは、帰つてきたらその日のうちか、翌日にはまとめの作業に入るわけですね。

山形 そうそう。熱心にやるという意味では、若い頃とは全く変わつたらんね。教育長やつとった時と同じだ。やるとなつたら根を詰めるからね。わが身はあまりかまわん方で(笑)。それが元気な素かもしれん。

前原 それだけ根を詰めて作業をされていたら、奥さんも気を遣うといったことがあるのではないですか。

山形 お茶を入れてくれたり、うまいコーヒーを入れてくれる(笑)。催促するよやなのう、おい(笑)。いや、これ(敏子夫人)の協力は強いはず。山から下りてきたら、洗濯してくれるしなあ。前は一緒に登りようつたんじゃ。わしよ

り早う登りようつたけえな。わしはねつちりねつちり上がる方で、これはすつすつ、すつすつ上がる方じゃけえ。

前原 ということは、ある意味で、奥さんとの共同作業と言つても過言ではないですね。

山形 そりやあもう、あれ(敏子夫人)がおらなんだら、わしやあ、とてもじゃないけど、そりやあ、やれん。そりやあ、あれにやあ苦勞させとるけえなあ。あれにやあ大きなことは言えんで(笑)。でもなあ、調査から帰つてきて、机に向こうで縄張り図を描き始めると、のほせしもうてなあ。困るんじゃ(笑)。「今日はここまで」という区切りがない。時間の観念が全然のうなつてしまふ。でもまあ、だんだん険の方がなあ、親戚筋がだんだん濃ゆうなつてくる(笑)。

前原 では、親戚に導かれた時が作業の止め時ということですか(笑)。

山形 そう、すぐ寝てしまふ。そして朝起きて朝食を摂つたら、すぐに図面を描くか城に登るか。それ以外に時間の持て余しがない。僕は酒や煙草は全然やらんしね。散髪も自分でする。とにかく無駄な金は使わんようにして、これ(山城研究)に金を集中しとる。山城に行くガソリン代とかもあるしね。なのに、最初の頃は、図面を描くロットルペン(ロットリング)を折るのに、わしやあ、よくにくたびれたで(笑)。あれ、高いんだわ(笑)。なあ、めっちゃくちゃ高い。一〇本や二〇本じゃないぞ、折つたのは。あれは一本、二五〇〇円くらいするからねえ。それが、ちよつと引つ掛かるとポコツ、ポコツと折れる。じゃけえ、ムカつくの何の(笑)。

四 城を訪ねて、ひとに会う

— 調査余談あれこれ

前原 山城の調査にはシーズンがあると云う人もいますが、やつぱりママシが出るような時期



には行かないんですか。

山形 いやいや。年がら年中行つとる(笑)。マムシを踏んづけてもどういこうとはない。矢筈(高山城・旧加茂町)に登りようる時にな、「あんた変なもん踏んどるで」いうて言われたけえ、見たらマムシだつてなあ。「踏んどるわい」いうて(笑)。それで棒でポイントと放つてな(笑)。また、三倉田城(旧美作町)に登つた時にな、じつと見ていたら、怪しいものがおつた。「こりや山ウサギだな」と思つとつたら、その山ウサギの向こうに熊がおつた。「はあい、はいっ」と大声を出したら、熊とウサギが一緒になつて逃げてなあ(笑)。「おう、見た見た」いう感じじゃ。でも、あれはウサギを最初に見たからよかつたんじゃ。いきなり熊に出遭うとつたら、向かつて来られとつたじゃろうな。大きな声をしたら、向こうも逃げるんだ。それから鈴を付けて山に登るようしようる。

前原 熊に出遭うのは大変珍しいですな。

山形 珍しい、珍しい。初めてだった。熊に爪と牙がなけりやあなあ、組んで相撲を取つちやるんじゃが(笑)。相手は手も何も知りやあせんけえなあ(笑)。こつちはすくい投げとか巴投げとか知つとる(笑)。あと、猪は横柄なもんでな。子持ちだつたら別だけど、向かつて来るようなことはない。こいつには何回も出遭うとるけど、「おまえ、何しに来たんなら」いう顔もじゃあせん(笑)。わしを無視して、すつすつ、すつすつ行つてしまふ。驚いてくれるのは鹿。こいつはすごい。群れから外れた鹿が、群れに戻るのを何回か見たことがある。すごいね、あのスピードは。アツブダウン関係ないね。どこでも走る。すばらしいな、あの躍動感。網膜に焼き付いていゝる。鹿の角を持って帰ることはある。発掘調査の時にな、このヘラが一番ええんじゃ。

前原 まだこれからも発掘するつもりですか(笑)。



山形 いやいや(笑)。近藤仕込じゃけえ、いつ発掘することになるやらわからんけえな(笑)。

前原 忙しい時に言ってくるかもしれないね(笑)。

山形 近藤先生はもう言うて来まあ(笑)。遠いところに行つとるからな(笑)。

前原 他には何かおもしろい出会いはありますか。

山形 そうじゃな。「ちよつとうちに泊まつて」いうのは後家さんが多いから注意せにやあいけん(笑)。三人くらいおばさんがおつてなあ、「あんたるところに泊めてあげて、明日ゆつくり調査されりやあええが」とか言われる。「簡単に言うなあ」と思うて聞いとつたら、「ええんじゃ、この人の家はこの人ひとりしかおりやあせんのかええ」というてな(笑)。隣近所の人言うんじゃけえな。どういふことか、わしもようわからん(笑)。

前原 それは大変悩ましい話ですな(笑)。山形さんは泊まりで調査されることはあるのですか。

山形 泊まりで調査ということは絶対ないな。日帰りでも、だいたい遠くまで行くからね。朝思いついて、山口の津和野城まで家内と行くこともあつたからな。息子や家内とも、あちこちよう行つたで。

前原 調査に行かれると、いろんな人に出会いますか。

山形 そりやあ、いろいろな人に出会えるで。是久(旧中央町)に大谷城というのがある。ええ道がわからず悪いところを歩いとつた。そしたら、奥さんがおつてな。「大谷城いふのに登りようるんじゃ」と言うたら、「それなら大谷池の上にあるんがそうじゃろう」と言う。「そんなら奥さん、紙に道筋を書いてくれえな」と言うたら、奥さんが、「書くいうても目印も何にもないけえ、私が連れて行つてあげますらあ」と言うて、連れて行つてくれた。ちょうど松茸が生える時期でなあ。「奥さん、松茸は生えますか」と聞いたら、「松茸は生えようりやあしません」言うてな(笑)。「いや、「行つても大丈夫かな」という意味だ」と言うて、奥さんは「私と一緒に行つたら大丈夫だ」と言う。テコテコテコ早う歩いて、元気なおばさんじゃ。「こつから先がそうですけえなあ」と言つたら、途中から

奥さんはおらんようになってしまった。松茸を探しとったようじゃな(笑)。
前原 しかし、ありがたいですね。連れて行ってってくれるとは。

山形 いやあ、「足が達者なら連れて行ってやる」いう者はなんぼでもおる。そうかと思えば、山城の頂上に、家にあつた五輪塔を勝手に持って上がつとるもんもおる。「そりゃあお父さん、いけんで」言うたな(笑)。北房の高釣部城(旧北房町)だったな。「五輪塔は下ろさなきゃあおえんで」言うといた(笑)。

前原 山形さんが初めて行くような場所で、土地の人から不審がられるようなこととはないですか。

山形 不思議がられているのはいつつもだ。一番不思議がつとるのは犬でな(笑)。よう吠える。あれは始末が悪い。ほんに噛み付くけえな(笑)。警戒する人はおらんなあ。こないだ栗原の八ヶ城(旧落合町)に行った時に、おばさんが「あんたどこへ行きようるん」いうて聞くけえ、「わしやあ山の上に城跡があるいうて聞いて来とるんじゃけど、奥さんご存知ないかな」と言うたら、「そりゃあまあ、知つとるけど。あんたその城跡に何しに行くん。山を買うんか」言うてな(笑)。「わしやあ、城跡を調べに来とるんじゃがな」言うたら、奥さんは「ふん、そんなら、うちに泊まって調査すりゃあええがな」言うてな(笑)。話が全然違つてきた。かなわんわい(笑)。「山を買うんじゃないか」という不審はわりと聞くなあ。あと、松茸の時はもう寄り付かんけえな。山に入つたら、絶対に泥棒扱いにされる。

前原 調査をしていると、系図や古文書を見せてくれる人もありますか。

山形 あるある。古文書もあります。で。そうかと思えば、「籠いっばいにあつたが焼いてしもうた」という話も聞いた。「焼いたらいけませんで」と言つたら、「もうちよつと早う来りゃあ、ええのに」と言われたこと



もある(笑)。調査に行くと、土地の人が、昔の話なんかよくしてくれる。「うちに泊まってゆっくり調査しなさい」と言うてくれる人もけつこうあるんで。怖いおばさんもおるけどな(笑)。

前原 地元の方が場所を間違えて教えるということもあるんですか。

山形 あるある。間違えるいうんとはちよつと違うけどなあ、注連山城(旧落合町)に登つた時は大変だったなあ。地元の教育委員会に行つて、「どつから登るんが一番ええでしょう」いうて聞いたたら、馬鹿正直に一番急な道を教えてくれた(笑)。あとで調べたら、他に楽なええ道があるんで(笑)。教えてもろうた道は、どうらいとこでえ(笑)。「まあ、よう、こがいなところを教えてくれたなあ」思うてな(笑)。準備の足らなさで、わしが悪いんじゃけどな。教えてくれた人もよう知らんかつたんじゃろう。知つとる山は教えてくれてもええけどな、知らん山は「知らん」と言うてくれた方がええ(笑)。それに自分自身が思い込んで別の山に登ることもあるしな。いつまで経つても下りてこんから、山の下でこれ(敏子夫人)が大きな声で呼びよることもあるしな(笑)。全然違つ山に登つとつた(笑)。寺畑城(旧久世町)に登つた時も谷の反対側の方の山に登つてしもうた。山久世の方が見えたけえ、違う思うた。まあ、間違つたら間違つたで、考えることはあるけどな。上がつとつてよかつた。というのが、三浦氏が尼子氏に兵糧攻めに遭つた時に、牧氏が山久世から兵糧を運んで行つたというが、それが上がつてみてよわかかつた。山続きじゃけえね。あそこからだつたら俵を運ぶのは楽だわ。まあ、間違えて登つたけど、タダでは下りてこんかつたわい。完全にタダだつたいうのもあるで(笑)。何回かやつとるけえ(笑)。

前原 城跡だと言われて登つてみたが、「どう見ても城跡ではないな」というようなところもありますか。

山形 香炉寺山城(勝央町)。どないしても遺構がわからん。ありやあ、痛かつたわあ。香炉寺山城といえは、怪我をした。木の上を伝わつとつたら、木の皮が剥けて滑つて、落ちたところがまた倒木のあるところな。打身はあつたが、後遺症がないからよかつた。山王山城(旧北房町)でもそう。枯れ木にさばつて、

木が折れて、でえんと下に落ちた。すごい急なんだけえなあ。左の杖が引っ掛って、肩がねじれとんだろうな。ゲートボールに差し支えていけん(笑)。

敏子夫人 毎日薬を塗つとるけんな。

山形 今はほとんどええな。ものを持ち上げたらちよつと痛い。枯れ木

と生木の区別がつかんようなのは、注意がいるな。

前原 奥さんも、山形さんが遅く帰ってくるのがあったら心配されるんじゃないですか。

敏子夫人 そう遅くなることはないですなあ。

山形 前、こいつ(敏子夫人)と一緒に篠向城(旧久世町)を歩きようって、こいつの目の前から消えたことがある(笑)。

敏子夫人 下の道のところまで落ちとるんで(笑)。それで帽子だけが残つとる(笑)。目の先を歩いていたら、人間がポロンとおらんようになってびっくりしたわ(笑)。

山形 鏡野の何とかいう城でも、枯れ木にさばりようたら、下に落ちてな。落ちたところがよかつたわ。ザボンと(笑)。大井手を通つとつてなあ。そんなに落ちた。それじゃけえ、怪我も何も無い。冷たいだけ(笑)。水いうもんはええもんだな。怪我がないけえ。だいぶん高いところから落ちたんだが。

前原 ということは、山城では大きな怪我はされていらないのですね。

山形 まあ、受身ができとんだらうなあ。若い頃から柔道、剣道、相撲。やらんやつがないくらいやつとるけえ。美甘におる時に、あの赤柴部隊の生き残りの柔剣術の先生がおつてな。その人に習うたんじゃ。相撲は岡山県で一番になったことがあるしな。

前原 大変なもんですねえ。それなら熊と対決できるかもしれない(笑)。山に入っ



たら、冬場とか早く日が暮れることがありますよね。

山形 そうそう。よう昔の人が言うようつた。「阿呆が山の上で日を暮らす」いうてな。山の上は明るいけど、下に降りてみたら真つ暗だった、いうやつな。そういうのは気をつけて、ほとんどないです。

前原 美作地方で「あそこは登りにくいなあ」という城はありますか。

山形 やつぱり矢筈(高山・旧加茂町)じゃないですか。標高が高いけえ、行きにくい。普通の人なら充分登れるが、もう年を取つとるけえな。もう矢筈に行くのはたいぎいんじゃ(笑)。ものすこくすばらしい城じゃけどね。みんなと一緒に上がつていても、どうしても何十メートルか遅れて上がるようになる。みんなが休憩をしている時に追い付くが、追い付く頃にはみんなは休憩が終わつてまた歩き出す(笑)。わしゃあ、休憩できずに、じわじわ上がつて行くようになる。全然休憩なしで上がらにやあいけん(笑)。みんなと一緒に上ると大変なんじゃ。それで、みんなと一緒に登るんはたいぎなんじゃ。自分のペースで登るとね、何日でも続けて行くことができる。

前原 ということは、みんなと一緒に城跡を見に行つたり、調査するというのはしんどいということですか。

山形 そうな。今はひとりで登る方が、気も楽だし、体も楽だな。休みたい時に休んで、それでいけにやあ、次の日に来りやあええんじゃけえな。全然焦ることはない。でもなあ、親切な人がおつて、一緒に山に連れて行つてくれるのはうれしい。案内してくれるのはなあ。

五 山城の「全部」を未来に活かす

— 普及と保存活動

前原 山形さんが長年にわたつて美作の中世山城調査をされてこられて、今一番感じておられることは何でしょうか。そして、これから先、どのように遺構を活かしていったらよいと思われませんか。後進の方や、そして若い人々に対してはい

かがですか。

山形 ああ、そうだねえ。やつぱり「物を大切に、古里を大切に作る人いうんがおつて城跡が残っている」、そして、「自分ところに苦勞した先祖がこれほどいたんだ」ということをね、はつきりと知ってもらいたいという気があるですなあ。それはあの、すごいですよ。弊履のごとく人の命が捨てられた時代にね、作った城跡が歴然と残っておるわけですけえな。この城を讀めるという意味よりか、「こういうものがなぜ作られて、これをどういう人間が命を懸けて作って、こういうものがなぜ残ってきたんだろう」という、その気がやつぱり強うてねえ。だから、僕が一番喜んで飛んで行くのは、子どもが山城を研究したいということ（要請）があった時ですな。ひとつの例を挙げると、山王山城（旧大原町）なんかは、（案内したあと）山城の冊子を子ども自身が作って送ってくれたんです。もうびっくりしてね。まあすばらしい感覚だなあと想着。山に登る時は、「（服に）ダニが上がりよるぞ」とか大騒ぎしながらね（笑）。せえでも、あつちい歩き、こつちい歩きして質問したり、いろいろ話しうして。

前原 小学生ですか。

山形 六年生です。卒業記念に登るということで、冊子を作るという目的はその時には知らなくて、帰ってから作って送ってきた。びっくりした。

前原 なるほど。そういう若い世代の人に興味を持ってもらったり、関心が受け継がれていくことが一番うれしいということなのですね。

山形 そうそう。うれしい。子どもが城跡に登りたいということがあれば、呼んでもらえればどこでもすぐに飛んで行きますけえ。つまらん説明じゃけどな、遠慮なしに行つて、させてもらうことにしとるんです（笑）。史跡の大切さを話します。どのようにしたらわかりやすい話せるだろうかと、そればかりを考えてますね。難しく話してもいけませんけえな。

前原 なるほど、そうですね。ところで、よく山城ブームといいますが、城や武將だけを祭り上げるような風潮も一部にありますか、それについてはどうですか。山形 それはあまり好みじゃない。けどまあ、それを利用して、関心が向いてく

れりやあええけどね。「いかに百姓が城を作ったりするのに苦しかったか、略奪していく奴にいかにか戦うたか」ということを知ってもらいたい。「歴史の表面に出てこない潜在的なものを知ってほしいなあ」という考えがあるんでね。武將だけじゃのうて、「全部」を見てほしい。本当にじゃなあ、「百姓なんかどのくらい苦勞して作ったことか。篠向城（旧久世町）の磐座なんか見たら、ほんと涙が出るよな。どれくらい苦勞して山を削つてあれだけのものを作つただろうか。垂直に岩を削つて、一メートルくらいの幅しか残っていない。それが土塁みたいな形になつているが、土塁じゃなく削つた岩が残っている。それが戦国時代なんだ。そうした苦勞の姿は必ず見てほしいし、何とか表わす方法はないだろうか。僕はここ（机）から縄張り図しかよう描かんの、それしかできんけどね。

前原 「全部」ですか。なるほど。城主にだけ注目するということはありませんか。

山形 いやいや、よくないというわけではない。それもあつてもええんで。けど、本当はそういうところ（百姓たちの苦勞）を見てもらいたい。そりゃあ苦勞しとると思つて。鉄にしても、つるはしがあつたかどうか。鉄の棒はあつたでしょうけどな。石を削るのは先が鉄でできたらにゃあいけまいが、先がすぐちびて（なくなつて）しまう。こりゃ大変な仕事で。何日もかかつとる。前原先生にしても森さんにしても、道路の岩を実際に掘つて取り除いた、というような経験はないでしょう。

前原 森 ないですねえ。

山形 僕は実際にあるからね。せえで、現代の道具をもつてしても、「あのくらい（日数が）かかる」というのがおよそわかるからね。実際に生で経験しとるから、「昔は」どのくらいしんどいか」ということがね、わかる。基本は木製で、先っちょだけ鉄を付けた道具が多かつたと思う。そういう道具を使うて、岩を掘るんですからなあ。あの横掘りうのは絶対いうてええくらい岩にぶつかるんですから。土だけをどかして作るというの数は少ない。どれだけ大変か。矢筈（高山城・旧加茂町）なんかもだいたいぶん岩を削つとるよな。

前原 ところで、先ほど、山王山城に登った子どもたちの話がありました。次代を担う子どもに山城に興味を持ってもらうためにはどのような方法が有効だとお考えですか。

山形 そうなあ、やっぱり学校で教えてもらわなきゃあ、どうにもならんね、こりゃ(笑)。学校の先生に関心を持ってもらわんとね。現代の先生は転勤族が多くなつて、郷土意識いうもんが稀薄であるということが多い。そういうことは、すでに先生になってからじゃあだめで、大学における時分から教育してもらわんと困る。「自分が赴任した地域の歴史を、生の教材にして教える」というようなことがあつてもええんじやないかと思うけどな。わしは高適な理屈はわからんけどな(笑)。

前原 いえいえ、元教育長さんですので、ご発言はもつともです(笑)。

山形 それから、保護者の方も、先生に関心を持ってもらうように働きかけんといけんわな。

前原 そういう意味では、各地区に山城の保存会ができたり、美作の中世山城連絡協議会ができたことはとてもよい動きといえませんか。

山形 とてもええですなあ。山城に子どもたちを連れて上がるように、実際に学校に頼みに行ったりしたところもありますな。僕は美甘から津山市の方に移って暮らし始めた時に、神楽尾(津山市)や医王山(岩尾山城・津山市)の方がどうらい一生懸命活動しようのを見てびつくりしたけえな。一方で、活動がない、遅れた地域にも気がつくな。ええ城があるところもいっぱいあるんじやが、惜しいな。

前原 保存会のみなさんは城跡の草刈りをされたり、道を整備されたり、地道だがとても大切な活動をされていますね。数多くの山城を登ってこられた経歴から、城跡の保存という点で、どのような提案がありますか。

山形 美甘に高山という城があるんだ。そこに子どもを連れてよくキャンプに行っていた。一番てっぺんが鬼芝というか、山芝というか、それが一面に蔓延つてとつてね。裸足で遊んで歩ける。その山のイメージがいまだに根強く頭に残っている。丈も低いしね。城跡を鬼芝で覆わせたら、強いし、絶対に長持ちする。

それをやってくれんかなあ思うて(笑)。白旗城(兵庫県上郡町)に登った時にも感じたが、あそこも鬼芝で覆われとんです。すばらしいと思いました。鬼芝を中心にして保存を考えてくれれば、大変ありがたいと思います。

前原 城跡に桜を植えるといったところも多いですよな。

山形 多いではない、ほとんどじゃ(笑)。木は植えたらいいけん。植えとるものは伐ったほうがええ。

森 その点は、どうでしょうか。議論があるところだと思いますが。

山形 いや、木はどうもいけん。風が吹いて倒れたりしたら、根こそぎ土が持っていられる。土に大きな穴が開いてしまう。土壘なんか惨めなもんじやなあ。二〇年も三〇年も経つてみなさい、「ここに遺構として、もともと穴があつたんじやな」といった感じで判別がつきにくくなる。なるだけ遺構の形が変わらんようにせにやあいけん。鬼芝だつたら背丈が低いし、根も深く張らんからちようじやええ。鬼芝にして、時々背丈が大きくなったのを鎌で刈るくらいがええんじや、と思うとる。

森 なるほど。一方で、道を整備しすぎているところもありますよな。

山形 そうそう。道は人がよう通れるくらいでええ。建物を作るのもよくない。木柵なんかも「こういうのがあつたんだぞ」と見せたい気持ちはたくさんあるけど、おえんな。あつても、ごくごく一部分でええんだ。城跡にセメントなんかを使う整備もおえんで(笑)。また、土を削つたらアウトじゃけえな(笑)。

前原 保存や普及のためとはいえ、過剰な整備をしてはならない。遺構を一切壊さない形を最優先すべきだというお考えですね。

山形 そうすな。使うとしても、自然のものじゃないといけんな。それから、僕は山城に上がる時は邪魔になる木なんかあつたら、除けて歩いとります。

前原 山形さんは調査のために城跡に行かれる際も、のちのち登る人のことを考えて木を除かれているのですか。

山形 そうそう。できるだけ通りやすうしとこうかなと思えますな。片付けながら上がります。こないだ連れと一緒に篠向(旧久世町)に上がりようつて、連れ

から「山形さん、もうええかげんにして登ろうや、こりやかなわんで」言われてなあ(笑)。風が吹いたり、雪の重みで枝が折れたりして、道がだいぶん荒れとったんだわ。「車で上がるのに難儀するだろうな」思うて、ひとつひとつ除いて上がりようったんじや。連れのもんが、「もう時間がかかってかないませんけえ、私が別の日に来て除けますけえ、上がりましょう」言うてな(笑)。まあ、できるだけしょうります。そういうことは自然に身に付かやあ、なかなかできんことで。

前原 「山城を見たから登る」という気持ちだけはできないことですね。

山形 そうそう。みんながそういう気持ちを持って、少しでも山をきれいにしておくことが大事ですな。それから、おかしな整備をしたり、自分勝手に遺構を壊しようもんに口を出して注意する。「おっさん、そりやあおえんで」言うてな。そりやあ、壊されるの見たら、堪らんもん。

前原 なるほど。一方、山形さんから見て、遺構の状態もよく、国指定史跡としても充分通用すると思われるのはどこですか。

山形 はい、岩屋城(旧久米町)。即座に言います、岩屋城。それからあれがええでな、篠向。規模は大きいしね。僕がまだ調査してないところがたくさんあるしね。少なくとも篠向は県指定に早くせんと。ただ、無線アンテナがたくさん建設されよう。ありやあいけん。止めさせんと。

前原 そういう面を含めて、行政に期待するところはありますか。

山形 役所に期待するところやこう、ひとつもありやあせん(笑)。期待するのは森さんとこだけじゃ。まあ、もちろん、本を出してくれるんじやけえ、その点についてちやあ津山市はありがたいで(笑)。それはもう、すこいなあ思うとる。保存や整備については、城跡に登る道くらいは整備してもらいたいなあ。三五〇以上あるけえ、全部は無理かもしれんけど、ひとつでもふたつでもそうした整備は増やしてほしい。役所にはそういうことを願いたいなあ。ちよつとした登り口ぐらいでええんじや。小さい道でええんじや、史跡を壊さんようになあ。説明板やこういらん。「某城登り口」いう道標みたいなもんがありがあええんじや。そ

れだあけで城が好きなもの登って行く。少しでもみんなに山城に登ってもらいたい。もつと贅沢を言えは、土橋なら土橋に見えるように、堀切なら堀切に見えるように、一箇所でもええから、きれいに草を刈つたりしていたら、みんなが見てわかりやすうなる。そういうことにも役所は力を入れてくれりやあ、なおええな。毎年いうたら予算が大変でしょうけどな(笑)。

前原 そのためには、まず、「どのような城が、どこにあるのか」という初歩的なことを認知してもらわないといけませんよね。そういう意味では、『美作国の山城』の発行は大きな第一歩になるのではないでしょうか。

山形 そうですな。「知ってもらおう」いうことほど、大事なもんはありませんな。

六 山城で遊び、考える

— 『美作国の山城』で伝えたいこと

前原 山形さんは、以前から、ご自身の成果を出版という形で世に問いたいというお気持ちはあつたのですか。

山形 ある、ある。でも、みんなが認めてくれてね、「出してやろう」いうことにならんと。個人ではとても出せんからね。ある出版社なんかは、この頃「いつでもええよ」と言うくれた。それなら安心だなあ」と思うて。

前原 それは、縄張り図や解説のうち、よいものだけ載せるといふ形になるのですか。

山形 いや、全部のものを載せるといふことです。大部なものになるけど、シリー



ズということですね。

森 いいことですねえ。今回の『美作国の山城』で山形さんの図面を採り上げる数は二〇〇余ですが、すでに三五〇を超える城を調査された縄張り図の作成状況はどんなもんですか。

山形 まあ、ぼちぼち進みますけどね。

前原 今回は収録されませんが、城郭の解説をすでに書かれているものもかなりありますよね。

山形 そうしたものを含めて、別の形で出版することになります。森さん辺りがみたら、「選うとる」いうようなところがあると思うんですけどね。わしん力じゃあこのくらいしかできんけえなあ(笑)。

森 いえいえ、滅相もない。

山形 曖昧な解説は書かんことにしとる。間違いを書くくらいなら、書かんほうがましだと思つとるからな。『作陽誌』は、僕は信用しとるから、それにあるものは全面的に書こうかなと思つとる。『作陽誌』の中でも、明らかにおかしいところは糺さないといけませんかな。

前原 『美作国の山城』では、森さんや中西義昌さんが解説を書かれているので、参考にされたらよいと思います。

山形 今回、『美作国の山城』を作る過程で、一例として、医王山(岩尾山城・津山市)の組見本を見せてもらいましたけど、すばらしいのが出来ゆうりますなあ。あれを見せてもらうた時には、僕は背筋が寒うなりました。感激しましてなあ。涙が出たもん。机の上に飾って拝みようるんじゃもん(笑)。自分の縄張り図を世に残すええ機会だと思つて、ありがたかつたです。学歴もない、ド素人の作業を認めてもらつて、出版してくれるというのは、僕自身、本当にありがたいですな。

前原 確かに、公的機関が発刊する書籍において、一個人の図面を中心に載せるということは珍しいと思います。したがって、そのことだけを捉えて批判を言う人も出てくるかもしれません。また、心無い人の中には、「学者ではない」とい

う理由だけで、低く見たり、馬鹿にするといった風潮もいまだにないわけではありませぬ。でも、実際の図面を見て、学術的にきちんと評価しないといけませんよね。その上で、よいものならば、後世の方もきちんと活かす形になるはず。山形 前原さんが評価して下さつたら、わしやあ、これくらいありがたいことはない(笑)。

前原 いえいえ、とんでもない(笑)。

山形 そうですね。だからこそ、それ(笑)を津山市がするというのがすごい。それにスタッフがええわな(笑)。

森 いえいえ(笑)。

前原 今回、本を作るにあたって、「これも入れたい、あれも入れたい」という図面があるのではないですか。

山形 それはありますけどな。まあ、作業する時間もないし、体が続かん(笑)。

前原 『美作国の山城』には、山形さんの縄張り図がたくさん収録されるわけですが、どういふところに力点を置いて読者に見て頂きたいと思ひますか。

山形 ああ、そうだな。宗教、とくに神さんと城跡というのは、かなり密接に関係を持つておつたなということですかね。これは城山を保存・保護するためか、信仰のためかわからんのんじゃけどな。必ず城跡の上には何らかの神を祀っている場合が多い。

前原 それは仏さんではなく、やはり神さんですか。

山形 神さんです。五輪塔を上げていくというのはほとんど稀でね(笑)。ほとんどは祠です。愛宕さん、妙見さんも多い。お大師さん、それから役行者が上がるしね。そういうのが多いですな。

前原 城跡と宗教との関連に注目すべきというご指摘ですね。いつ勸請したかわからない場合が多いので、一概に評価することは難しいとは思ひますが、城跡に祠が多いという事実をご指摘されているのだと思ひます。他に注目して頂きたいことはどうですか。

山形 堅堀の役割ですね。なぜ堅堀を作つたのか。緩斜面だから作つたのだとも

いえる。いい例が、美作市(旧大原町)の山王山城と竹山城。山王山城は緩斜面が多く守りにくいから、堅堀がやたらにある。一方、近いところにある竹山城は峻険な山にあるが、堅堀なんかはなくて無味乾燥。こうした対比がおもしろい。そういうところには注目してもらいたいな。

前原 美作国と他の国の山城の違いはどうか。また美作国の山城でも、東と西、北と南といった地域性の違いについては如何ですか。

山形 他の国のことはようわからんが、美作と備前の境については、例えば旧落合町の上山城(柳森城)、旧建部町の鶴田城。規模が大変大きいんです。それに守りもひじょうに多彩にできている。そういう意味で、境目の城というのは、備前側はようわからんけど、美作の方はすごいな。それに比べて、旧川上村、旧八東村、旧中和村は城跡が少なく、伯耆との境については美作側の守りが弱い。何でだろうか。備中と伯耆との境は城跡が随分多い。規模や内容とかは調べてないからわからんが、数からいうたら、伯耆側も備中側も多い。それから、備中と美作との境については、備中側の城が随分いいんです。そのわりに、美作側が悪いのは何でじゃろう。

前原 因幡国と美作国、播磨国と美作国との関係ではどのようなことがいえますか。

山形 因幡と美作との間は問題なんだ。矢筈(高山城・旧加茂町)を作った草薙氏が目立つくらいなんだが、美作側では、那岐山を中心にして無数にある。あそこは、僕はようせん。岩屋城(旧久米町)も周辺の城を調査するのに時間がかかった。やりかけたら、どんどんやるんだが、那岐山の周辺だけはとて手が出ん。小さい領主がたくさんおる。【七人の侍】の映画に出てくる、村を襲う野武士集団を思い出して、無意識的にも嫌がっているのかもしれない(笑)。単純な考えで、学術的ではないけどな(笑)。だから、那岐山周辺の山城については、ようわからん。でも、本当は(城跡に)上がってみて、研究したいなあ思うと。播磨との境は、赤松氏が正式に守護の肩書きを持って入ってきているから、わりとスムーズなんじゃないかな。赤松氏との関係、親戚筋という家も多いから。あっち行っても、

こっち行っても赤松氏。赤松氏の悪口言うたら、ド突かれるんじゃないかという(笑)、そんな人が多いな。是久山城(旧中央町)の近くなんかでも赤松氏が多いわな。久米の一部には毛利の親戚筋がおったりしてな。うっかり、毛利の悪口は言われりゃあせん(笑)。

前原 やっぱり悪口を言うと、文句を言っただけの人はいませんか(笑)。本当は悪口ではなく、学問的に裏付けられた説明をされていると思うのですが。

山形 おるおる。いっぱい。ムスツとして、物も言わんようになる(笑)。やっぱりその土地に行って、うっかりしたことは言わりゃあせん。赤松さんは赤松さんで褒めてな、毛利さんは毛利さんで褒めて(笑)。菅家党もいろいろあるで(笑)。

前原 それは大変悩ましいですね(笑)。冷静に学術的な説明を行っても、心無い方から批判されることはあるものです。さて、一方、美作地方以外の読者にはどのようなことを伝えたいですか。

山形 そうですなあ、やはり「美作には三五〇、四〇〇、そして五〇〇近い城があるんだ」ということですな。それは声を大にして言いたい。そして、「今のところ、縄張り図は二〇〇くらいができていて」ということ、また、「研究はこの段階まで進んでいる」といったことも伝えたいですな。これから先、自分が描く縄張り図は少しなもの描けるはず。昔描いたもので直したいのは山ほどあるけどな(笑)。そこまでしようたらかなわん(笑)。自分が調査した三五〇の城だけはきちんとした縄張り図を描き上げたいですな。

前原 なるほど。一方、本当は、山形さんだけが頑張るのではなく、そのお仕事を新しい世代の人たちが引き継いでいくことも大切ですよな。山形さんの図面を叩き台にして、「山形さんよりも、もつとええ図面を描



「いちゃるう」という若い人が出てくるというのも期待される場所ではないですか。

山形 こりやまたええこつちや、そりやもう(笑)。そういう人が出てきてくれるとうれしいねえ。でも、若い人いうても、こがいに金にもならん仕事をするのは定年にならにやあできんだろうなあ(笑)。わしやあ、思うとつたもん。「定年になるまで仕事はそこそこにして、体を保つといて、定年からは絶対遊んだるぞ」いうてな(笑)。せえで、遊ぶんが、これじゃ。城じゃ(笑)。

前原 遊んでるわりには、随分根を詰めておられるようですが(笑)。

山形 いやいや、本人はどうらい楽しいんで(笑)。誰やらが言うようつた。「山形が城に上がつとるのを見てみい。走り回りようらあ」いうてな(笑)。最近はずらんけど、最初の頃は走り回りようつた。図面を描きようりやあねえ、「ここはもういつべん見とかんと描けんなあ」いうところがようけ出てくる。そしたら城に飛んで行きようるん。まあ、僕より若い人といえねえ、岡山の古代吉備文化財センターの宇垣匡雅さんなんかね、だいぶん調べてくれとる。参考になるんがものすごい多かつた。位置が書いてあるんがええわなあ。位置がわかつたら、こつちも探す(そして登る)けん。あれでどんだけ助かつたか。また、畑和良さんなんかねえ、そういう一翼を担ってくれるんじやないかと希望を持つとるんじやけどね。畑さんには備前なら備前を担当してもらって、備中に誰か仲間でも募ってもらって、何とかそれらを集めて岡山県全体の城郭について縄張り図を作りたいんだけどね。若い人には、しっかり山に登ってほしい。「山形はこころをまだ見てなかつたぞ」いうように、どどん僕らの図面に書き足したり、直してもらいたいね。僕の図面が叩き台になるということは、言い換えれば教科書にもなるということだから、とてもうれしいねえ。ありがたい話だ。

前原 【美作国の山城】という書物が、書き込みの多い本になればいいですよ。そういう意味では、研究成果としては、完成形というよりも、まだまだ発展途上の、可能性を含んだ書籍と位置づけてもらいたいと思います。それにしても、お話がおもしろいものですから、今日はつつい長時間にわたって、お話を伺うこ

とになりました。貴重なお話を本当にありがとうございました。奥さんにも大変お世話になりました。

森 大変ありがとうございました。お疲れさまでした。

山形 いやいや、こちらこそ。今まで三五〇ほどの城跡を調査したけど、今度、「美作国の山城」を作るにあたって、「実際には、美作に五〇〇以上の山城がある」と聞いて、ように往生してしもうて(笑)。

前原 聞いたからには気持ちがあ動いて、うずうずしますか(笑)。

山形 そうそう、「また死なれんぞ」いう気になって困りようる(笑)。

〔註〕この聞き書きは、当日の五時間余に及ぶ録音記録から前原が註したものであり、発言内容や雰囲気などについてはできるだけ忠実に記録することに努めた。なお、その際、発言順序の入れ替えについては前原の判断で適宜編集を行い、地名・用語の補訂などについても最小限の加筆を行っていることをお断りしておく。また、山形氏が語る美言言葉は、ごく一部関西弁が挿入されるものの、現代の方言資料として大変貴重なため、人柄を正しく伝える目的とともに、できるだけそのまま記録するよう留意した。

「聞き書き」を終えて

山形省吾氏と美作城郭史研究

前原 茂雄

山形省吾氏は市井の人である。いわゆる学術研究者と呼ばれる存在ではなく、高等教育に従事する教育者でもない。あくまで在野の立場を貫きながら、美作国における膨大な数の中世山城を独学で調査し、記録作業を行った。その成果の集大成ともいえるものが『美作国の山城』所収の縄張り図である。もとより、縄張り図の当否や今後の研究への活用方法などについては議論もあつてしかるべきだが、多様な美作の中世城郭を概観するための基礎となるべきすぐれた労作であり、美作中世史研究はもとより、岡山県の地域史研究にとつても重大な意義をもつ業績といえよう。一方、そのような縄張り図がどのような思想によつて規定され、作成されているものであるかということについては、充分検討しておく必要がある。

山形氏が山城調査に関心をもつた直接の契機は後述するとして、その前提となる思想については、戦後における二つの実践が大きく影響を与えていると考えられる。山形氏は終戦前に海軍に召集され、終戦時には美甘村で自宅待機という状態であった。当時の多くの日本人がそうであったように、軍国思想を全面的に享受し、敗戦を疑うことすらなかったという。一方、終戦後は、家業の石工を継ぎながら、アメリカに緒を發する4日クラブの運動に共鳴し、多くの青年たちとともによりよい農村・農業を構築するための活動を学んでいた。二七歳という異例の若さで美甘村教育長に就任したのち、山形氏は連日連夜、美甘村内の集落を回り、地区住民らと討議を重ねたという。十羽養鶏や保温折衷苗代、栗の接木といった実践的な農業技術を新たに普及させることによつて、戦後山間部ではまだ色濃く残存していた食糧難を回復させ、農村の精神的な疲弊をも解消させるべく奔走した。4日クラブで学んだ理論の実践である。当然、当時の保守的な農村部では

世代間の対立や異業種に対する反発などが強く、進歩的で若い教育長への風当たりはきわめて大きかった。その中にあつても、「前へ前へ」という生来のヴァイタリティーで、少しでも「よりよい暮らし」を実現させていくための労を惜しまなかった。日給であつた教育長の僅かな手当だけではとても務まらない活動であり、使命感と社会奉仕的な発想が根底にない限り、なしえぬことであつたろう。

一方、教育長時代には大きな出会いがあつた。当時岡山大学助手であつた近藤義郎氏が宇南寺のたたら製鉄遺跡の発掘のため美甘村を来訪したのである。当時の近藤氏はほぼ同時期に、著名な月の輪古墳（旧柵原町）の発掘も手がけていた。月の輪古墳の発掘は、専門の研究者だけでなく、地域の住民にも発掘調査の協力を仰ぎ、連日連夜の報告会を通じて「ともに歴史を学ぶ」という実践をなし、のちに、戦後歴史学における「国民的歴史学運動」の金字塔とも評価された。近藤氏は強烈な個性と深い探究心で岡山県各地の発掘を主導したが、その近藤氏との度重なる交流こそ、山形氏の幼い頃からの史的探究心をより刺激したことは間違いない。また、「国民的歴史学運動」の渦中にあつた近藤氏と密接に交流すること、歴史教育や史跡保存、その活用の方法についても、当然考えを巡らす端緒になつたことであろう。敗戦によつて、その戦争責任の所在について深く考慮していた山形氏は、民衆に力点を置いた歴史の掘り起こしに共感していたという。自らの手で地下を発掘することにより、たたら製鉄遺構という民衆の生業活動の一端を明らかにしていく興奮は、のちの山城調査の活動にも通底するものであつたろう。

すなわち、戦後における山形氏は、「よりよい農村を作る」といった思想を、声高に主義主張を唱えるのではなく、人々と対話することで、あくまで実践的な活動の中にもこそ深化させていった。物心ともに郷里の豊かさを達成していくための使命感と社会的奉仕の精神を併せ持ち、醸成させていったのである。また、「国民的歴史学運動」の実践者である近藤氏と交流することで、民衆史研究の意義と歴史教育、史跡保存・活用の思想を学んだ。この二つの思想と実践を、当時、山形氏がどの程度まで意識的に自らのものとしていたかについては不明である

が、このことは、のちの山城調査・研究の思想と実践において、きわめて共通した形をとって再現されていくのである。そしてこの二つの方向性は、それぞれに分ちがたい連関の中にあつたのである。

美甘村から大阪に出て就職し、六〇歳を超えて郷里美甘に戻ってきた時には、たたら製鉄の研究に打ち込むつもりだった。もとより、山形氏が語るように、中世のたたら製鉄について研究するよう近藤氏に示唆を与えられたことに端を発するが、もともと製鉄遺跡を自らの手で発掘した経験も、関心の継続を支えていたのであろう。中国地方のたたら製鉄の中心地である出雲地方の吉田や横田に足繁く通い、製作法を実践的に学んだ。と同時に、製鉄業の利権に接近する中世領主層の動向や、周囲に所在する数多くの山城に関心が広がっていく。これが、山形氏による山城研究の直接の契機となつた。

当初は岡山県全体をその調査対象とするつもりであつたが、早い段階から美作地方に限定したという。郷里・美甘村の麓城（城山）から調査を始めたが、その際、きわめて重要なことは、山形氏が当初から記録保存という発想を意識的に保持して調査を行ったことである。一般の歴史愛好家や山城愛好家の場合、登山そのものや、遺構を確認する楽しみに特化する傾向がまま見られるが、山形氏の場合、それだけに止まらなかつた。もとより、幼少期からの思い出深い麓城の形状改変に心を痛めたという理由もある。しかし、一方で、若き日の発掘調査従事者の経験から、史跡の改変に備えてできるだけ正確な記録保存を行うべきだという思想を、それまでに充分体得していたことも忘れてはならない。また、記録保存の目的を語る際、山形氏が表現した「後のものの便利がええんじやないだろうかな」という考え方は、史跡を個人の一時的な楽しみみの対象として捉えるだけでなく、地域社会に普遍的かつ永続的な価値をもつものと認めた上で、正しく伝承することに意義を見出したものとして特筆される。この姿勢は、記録保存の側面だけでなく、調査や登山の際に倒木などを除外し、登山道を進めるだけきれいな状態にしておくという山形氏の良心的行為とも共通する。すなわち、山城という史跡を地域社会の重要な遺産と考え、記録と形状の両面から後世に正しく引き継

いでいこうという姿勢の表れなのである。

また、山城を地域社会の遺産と考える山形氏の発想の根底には、戦後歴史学が追究してきた民衆史的視点が色濃く反映している。山形氏は再三再四、領主層への嫌悪感を吐露する。領主層を「庶民をいじめた側」とし、武將や武士団のみを採り上げて顕彰する風潮を「好みではない」とする。そして、山城を調査・研究する最大の目的を「自分たちの地域の人々がいかに苦勞して城跡を作り上げたか」ということを明らかにすることだと捉える。加えて、「城をいかに現在の形まで残してきたか」ということにも思いを寄せる。つまり、山城遺構を「地域の民衆が苦勞して作り上げた結晶」として位置付け、それを史跡として継承してきた近世・近現代の人々の心性についても十分な留意がなされるべきとの主張である。いわば、美作の山城を領主層の史跡としてだけではなく、「民衆の史跡」と捉えなおしたところに山形氏の特徴がある。そのことは、「歴史の表面に出てこない、潜在的なものを知ってほしい」という山形氏の表現に端的である。遺構を実質的に作った人々、史跡として守り続けてきた人々への尊敬の念が痛切に伝わる。評価の当否は別として、山城遺構に宗教施設が多いという事実をあえて強調したことなども、そうした史跡保護の継承性に思いを寄せた帰結であろう。しかしここで重要なことは、民衆からの視点を第一義としつつも、一方的に民衆の視点からだけ史跡を捉えるのではなく、築城主体である領主層にも十分な目配りを行うべきという、山形氏の表現によるところの、「全部を見てほしい」という考え方は、戦後歴史学以来、民衆史研究の重要な命題であつた。

一方、山形氏の思想と行動の先には、山城遺構の普及と保護問題がある。前述のような「後のものの便利がええんじやないだろうかな」という調査・普及活動に対する積極的な取り組みは、食糧増産を目指す4日クラブの活動を背景に、連日連夜、美甘村を駆け回った若き日の姿と重なる。社会奉仕と使命感に支えられた行動に、年月の隔絶や老若の違いはなかつた。各種の講演会や、登城案内、子どもへの興味喚起など、山形氏の旺盛な普及活動を支えているのは、「山城を知っ

てほしい」という、ごく明快な思想である。もとより、その背景にあるのは、「山城を作った民衆の苦勞を知ってほしい」という考え方であろう。多くの人々と対話することで「ともに歴史を学ぶ」姿勢を貫いた近藤義郎氏との交流の影響が、ここにも垣間見える。また、山形氏の普及活動には、史跡の損壊や改変を防止し注意を喚起する、という役割も大きい。「壊されるの見たら、堪らんもん」という山形氏の言葉は象徴的である。山城遺構は一般に奥深い山林部にあることが多い、一方美作地方において「構」と称する領主居館は、多くの場合、集落内や耕地内に所在する。いずれも、気づかれぬままに荒廃し消滅する危機をつねに孕んでいる。山城遺構がどこにあるか「知ってもらおう」という地道な活動が、実はもっとも効果的な保護思想なのかもしれない。その上で、「少しでもみんなに山城に登ってもらいたい」という目的のためにも、整備の問題に考えが及ぶ。史跡を壊さない形での登山道整備を行政に訴える一方で、植樹の禁止、樹木の伐採、代替植生として鬼芝の普及を提唱する。賛否には議論があるとしても、実践的な経験に裏付けられた発想であり、一考に値するであろう。山城遺構を累々と保存してきた先人たちへの尊敬の念を持ちつつ、歴史を生きる現代人として、後世に向けてそれを正しく引き継ぐ役割を、使命感をもって自任しているともいえよう。

とはいえ、それらを下支えしているのは、やはり、つねに継続している山城調査である。八〇歳を超える高齢であっても、なお、新しい山城遺構の調査と記録化作業を積み重ね、一方で既存調査の縄張り図を改善していくための調査にも余念がない。後世の研究に耐えうるよう、自ら作成した縄張り図に修正の筆を入れ続けているのである。少しでも新しい遺構を記録し、よりよい形で後世に伝えていこうとする使命感のようなものがある。しかし、それは決して鬼気迫った焦燥感と同義ではない。一方で、山形氏にはそれを「遊び」と捉える余裕もある。公的機関や専門の研究者が行う時間の限られた調査では決して獲得できない、在野の研究者だからこそ生じうるそうした余裕こそが、山形氏の息の長い活動を支えているのであろう。

繰り返す言う。山形省吾氏は市井の人である。遺構を「しっかりと歩いて、見

て、図面を確実に描いて出していくことが僕の方になる」と率直に語る山形氏の思想と行動には気負いが無い。とはいえ、戦後民主主義の思想を実践の中で体得し、戦後歴史学を間接的に享受した上で、市井の立場から現代まで支え続けた人の性根が、穏やかに、しかし明確に刻み込まれている。山形氏が作成した縄張り図はいつか乗り越えられるだろう。また、乗り越えられなければならない。しかし、その時こそ、美作城郭史研究が大きく前進する時でもある。山形氏が描いた縄張り図、その一本一本の線は、二本杖で登山をし、遺構を歩き、後世に守り伝えるための熱意に突き動かされて鉛筆を走らせた筋であり、汗が生み出した結晶の筋でもある。その結晶の意義を正しく理解し、その上で学術的に相対化することこそ、新しい世代がなすべき第一の課題となろう。